



蛸親爺

最終話 青田運八

雅^が雲^{うん}すくね

淡い日差しが萬屋の店先を包み、大売出しの旗がひるがえる。縁台には丸盆が置かれ、徳利が一本立ち、二本は転がる。脇には火桶を据え、灰に埋もれた炭の火を頼りに蛸が酒をかぶった跡をさらしている。

蛸は、店先に置かれた自転車籠に入り込んで、「出発進行、進行、進行」と続けながら、足を挙げて前と後ろに打ち振っている。

酔いどれの下には秋田犬が寝そべる。

「たーこ、たーこ。うーい。たーこ、たーこ。ひっく」と籠から出てきて、猪口で酒をふて飲みます。

蛸は冷え切った酒を手酌で注いだ。風が鳴る。

「寒いね。こう寒いと膝がしくしくしたものが、今じゃこうしてしなやかで。懐具合も軽やかで。正月にゃいずこにいるのやら。今年も十日で仕舞いでさ。ええ、仕舞いでさ」と縁台を打ち、拍子をとって歌いだす。

店のガラス戸が引かれ、萬屋の亭主が顔を出した。

「入ったらどうだい。風が冷たいのに」

「風が吹いて暮れになる。蛸になって籠に乗る」と自転車の籠に入り込んだ。

「あー、やっぱり蛸になっちまうとどうもな、お察し物だな。ええ、親爺。唄にしてみました。」

日が暮れりゃあ犬に乗る 年が暮れりゃあ籠に乗る 網に掛かって抜けなけりゃ 風呂敷包みを捨てるだけ 東西南北自由の身。ほいな、ほいな。どうです。自転車籠にも入れませう」と胴間声で勝手な唄を聞かせて萬屋の親爺に向く。

「それなら、おでんでも持ってくるから」

「あれ、いいいよ。酒で。まだ三本しか倒してねえんだ。使い納めだ。うんと飲んでうんと酔おう。へへ。明日の知れねえ酒はしびれるね」

土手の上を、小児が両手にどんぐりを盛って歩く。魚屋が大皿の刺身を鹽に担いで自転車で得意先へ向かう。隣の軒下では、炭屋が炭の上で鋸を動かしている。その先を、淡い青年が歩いて来た。

「いよっ、小川さんじゃないの」

「あっ、おじさん、こんにはは」

「お出掛けかい」

「ええ、公会堂までクラシックを聞きに」

「クラシックかい。洒落てるねえ。たまにはおれも浸りてえなあ」

「それなら一緒に行きませんか」

「いやいや。察してちょーだい」と円を作る。

「ああ、それなら、区民のための無料演奏会ですし、大丈夫ですよ」

「おお、そうかい」

「わん」

「そうだな。何かしら、ぱっと心がひろがることもないと。一つ、お付き合いますか。親爺、水」と籠から出る。

「じゃあ、行きましょう」

蛸は店先から萬屋の親爺に挨拶をすると、青年と並んで歩きだした。犬は後ろにつく。隣の唐辛子屋では猫の姿は見えず、先の切れた紐が石段に流れ落ちている。

「おれは間違っちゃいないんだよ。反省の仕様がなくてしょ。おれの場合。日一日と出口に近づく心持でも持たないと」と管を巻く蛸に、青年は長い影を作って歩く。

通りでは注連飾りや輪飾りが出され、横丁には風呂敷包みを下げた者が、歳暮の挨拶先を探す。

蛸が声を張り上げて言った。

「今年も押し迫ってきたねえ」

「そうですね。皆、歳を迎える用意に楽しそうにしていますね」

「正月はどこかへ行くのかい」

「とくには。親戚の家くらいには行くと思いますが」

「うん、まっとうな暮らしだ」

「おじさんは、どこかへ出掛けないんですか」

「海でも行こうかなー」と蛸が虚空に向かって喚く。

「海に行くんですか」と青年が真正直な顔をして聞いた。

「いや、まあ、なんつーか、行ったらどうなんのかな」

「わん」

「思い切るなって。へへっ。そうだな」

「おじさんは犬の物言いがわかるんですか」

「まあな」

「犬と話せる人はそういませんよ。がんばって下さい」

「へへっ。ありがとよ。そうだな、肯定的な発言ちゅうのは大方、間違っちゃいないが、否定的なのは、じつのところ合っていないものだ」

「わん」

「今のは、何て言ったんですか」

「今のは相槌だな」

通りの街路樹に、三角巾を頭に巻いたおかみさんが自転車で乗りつけた。自転車を下りて、苔のついた木の幹に群がる背の高い草を、次々と摘み取っては、籠に載せている。

「そーいや、あれじゃねえかい。クラシクなんてな。こう、かしこまつた出で立ちでなさや済まねえんじやねえのかい」

「別に、今日のは普段着でいいんですよ」

「せめてネクタイくれえ、締めてくりゃよかった。黒でもいいかね」と頭を撫でた。

「背広で来るのは勤め帰りの人くらいですね。さあ、公会堂に着きましたよ」

公会堂を控えた広場ではコンサートを待つ人々が、多くは散歩にでも出て来たかという様な気軽な身なりで弁当を食っていた。ベンチが満員ならば階段で、階段が埋もれていれば仕切りの石組みの上で、互いの間に弁当

や飲み物を置いて腹を満たしている。

蛸と青年は広場を端から端へ抜けて公会堂へ向かった。

「あれも客かい」

「そうだと思います」

「イメージと違うな。クラシックつうと、ワイン片手に紳士淑女が屋根のある大きな家で談笑していそうだが、いつからこうなったんだ」

「前からですよ。楽しみ方は人様々ですわね」

「そう。おめえさんはどうする」と蛸は犬に聞いた。

「わん」

「待つつもりかい。けっこうかかるんじゃないのかい」

「今日のは一時間くらいだと思います」と青年がチラシに眼を落して教え
た。

「だとよ。すまねえが、その辺で待っててくんな」

「わん」

公会堂は二階三階までぐるりと座席が備えつけてある。一階には教会堂の様に列を揃えて椅子が床を覆う。表で弁当を拡げる者が多ければ、椅子に納まる者は少ない。

「ええと、おっ、一番前が空いてんじゃないの」

「そこにしましょうか」

蛸は床を滑る様に動き、舞台近くまで出た。バネ仕掛けの椅子を手前に倒して、その上に乗る。椅子は元に戻るうとする。

「あ、挟まれた。ん、何ともないな。こりゃふかふかだ」

「大丈夫ですか」と青年は椅子を開けた。

「おかげで酔いが冷めたわ」

青年が鞆を蛸の椅子に載せた。

「これを重しとするといいですよ」

蛸は青年の鞆を肘掛にして坐った。

「よいしょっと」

「今日はバイオリンの三重奏ですよ」

「おれはこの年まで、クラシックてのを間近に見たことがねえな」

「きっと楽しいと思います」

腹を満たせた人々が公会堂に入って来て、席に着く。

演奏者が袖から出て来て、音の調節をしだした。全会が鎮まる。コンサートが始まった。

「おお」と洩らした切り、蛸はバイオリン弾きの奏でる音色とその動きに、つつまれた気味で見入っていた。

演奏の最後の一弾がなされ、曲が果てた。蛸が陶然とする間もなく頭の後ろから、「ブラボー」との絶叫が放たれた。

「おお、仰天した」と蛸は飛び跳ねた。椅子が畳まれた。

「ブラボー！」と背広を着た親爺が、またぞろ叫ぶ。

「ああ、何事だ」

背もたれに乗った蛸が、顔を紅潮させながら振り向いて、「あ」とまた驚く。

「あ、どうもすいません」とブラボー親爺は会釈をした。

「何だ。赤松じゃねえか」と蛸は旧知のごとくに名を呼んだ。

「は。なぜわたしの名を」

「何が『わたし』だ。近頃は相撲見物から、こっちへ移ったのか」

「ま、まさか青田か」と眼鏡のずれを直して近く見た。

「そうだよ。見たってわからねえだろうが。店番はいいのか。佃煮屋は今時分忙しいだろう」

「かかあに任せてある。いや、それより、おまえ一体どこでどうしていたんだ。いや、それより何だその姿は」

「何だって、蛸だよ」

「蛸はいいが、それならそうと、家に戻ったらどうだ」

「いや、それがよ」

小川青年が客の退くの見ながら、

「閉まりそうですから、ひとまず出ましょう」

雲の合間に月の色がぼかし出されて、公会堂では方々の出口から人々が流れ出る。その景色を犬が脇で見上げて、端から端まで右に左に眼を放つ。

「いやいや、それがよ、おれも行ったのよ。このあいだは手紙も出したし」

蹲っていた犬は、蛸の声に頸をもたげて真一文字に人々の間を駆け抜けた。

「おう、待っててくれたのか。ありがとよ」

「行ってどうしたんだ」とブラボー親爺が話の先を促した。

「ただの蛸としか思われなかった」

「おまえまた、いきなり入って行ったんだろ」

「まあな」

「そりゃ、いきなり蛸が現れて口をきいたら、たまげるぞ」

「手紙はどうなったんですか」と青年が聞いた。

「返事はまだだな」

「おまえ今、どこに寝泊まりしているんだ」

「うん、かつら町の山本って下宿に納まってんだ」

「下宿か」

「わん」

「何て言ったんです」

「家に帰ればいいとさ」

「その通りだ。帰りゃあいい。どうせ荷物なんて大してないんだろ」

「まあ壺くれえだな」

「そんなもん、あとで取りに行つて、今日はこの足で家に戻れ。とは言え、また驚かれるだろうから、おれも行つてやる」

「わん」

「おめえさんも来てくれるのか。すまねえな」

「よし、みんなで行こう」

路地にたてこめる幽暗を透かして、蛸とブラボー親爺と青年が並び立つ。犬があとにつく。

「いやいや、まさか赤松がクラシックとはな」と蛸は笑う。

「そりゃこっちのセリフだ。球場と間違えてんじゃねえか。ビールも焼きそばも出ねえぞ」とブラボー親爺も言う。

「わん」

「何、たまには合奏会も行くものだって。そうだな」

路地の流れの植え込みでは、斑猫と虎猫が寄り合う。ところに婦人が一人、しゃがんで斑猫を掻き撫でてやっている。

斑猫には首輪がついていた。首輪からは赤い紐が地面まで垂れている。婦人は小脇に抱えた包みを抱え直すと、赤い紐を蝶々結びにしてやったが、やがて寂しく打笑み、首輪を外した。

斑猫は顔を平らかにして虎猫と憩うている。

青年が口を開いた。

「あの、もしかして祝山通りの青田さんって、由紀さんのお父さんですか」

「え、小川さん、由紀を知ってらしたのかい」

「ええ、友だちでして」

「そりゃ都合がいい。つれだって行こう」とブラボー親爺は拳を上げた。夜空を低く鎖していた雲が散らけて、高く照る月の面輪おもてかを鳥が渡って行った。

青田家の板屋根がのった門には、注連飾りが掛けてある。門柱には太い竹に松の枝を藁縄で結び合わせた物を立て、正月を迎える用意を整えている。『青田 運八』と出した表札の上には、丸い電燈が取りつけられ、夜に備えた明りが灯る。垣根には蔓草がからまり、師走の風に揺れている。

白銀の月の光にひたされて、蛸、青年、ブラボー親爺、犬、門口に立つ。

蛸が生垣から蔓草を引っ張り出した。

「何してんだ」

「いや、ちよっと。何だかな。どうも、門が幅広い気がするな。ちいとはかし狭めた方がいいんじゃないか。石でも並べて」

蛸は足で垣根の下の砂利を入口に掻き寄せた。

「そういう大工仕事は日曜の昼間にやれ」

「こんなにひろかったっけな」

「前と同じだ」

「もったこう、蔓草をからませて入口だか何だかわからねえ様にしねえと」

「蛸壺じゃねえんだ」

「わん」と犬が垣根をくぐって庭に入る。

犬の吠えたのに、娘が丸い顔を見せた。

「あ、またあの秋田犬だ。こっちにおいで」と縁側に出て屈む。

門の前では、ブラボー親爺が挨拶する。

「ごめん下さい。赤松です」

「はあい、お待ち下さい」と蛸の妻の声が、磨ガラスをはめ込んだ戸の内より応じた。

「おまえはそこで待っている」とブラボー親爺が戸を引いて門に入る。

「あら、どうも、こんばんは」と蛸の妻が迎えた。

「いや、夜分にすいません。じつは青田のことなんです」

「あの、このあいだ、変な手紙が来て、蛸になったとか、ならないとか」

「手紙は読みましたよね」

「それが主人の字でもないし、何やらうねくねとして」

「いや、それは青田が書いたんですよ」

「え、赤松さん、主人のことを知っていらっしゃるんですか」

「そうなんです」

「どこにいるんです」

「気をゆるりと持って下さいよ。以前、ここに蛸が来たでしょう」

「ええ、蛸が」

「それが青田なんです」

娘も玄関に出て来る。

「お父さん、どうかしたの」

「それがね、赤松さんが、蛸なんて変なことを言って」

「蛸なんです。今の青田は」

「え」

「お父さん、やっぱり蛸になったんだ」

「そんな妙な話がありますか」

「いやいや、奥さん。私もね、不思議には思ったんですが、やっぱり青田なんですよ」

「お父さん、どこにいるんですか」

「今、外で待っています」

「え」

「呼びましょう。おい、青田入って来い。小川くんもな」

「え、小川くん」

「いや、どうも」と蛸は頭を掻きながら、敷居を跨いだ。後ろに小川青年。

「蛸。何で蛸なの。蛸が喋ったわ」と蛸の妻は額を押さえた。

「まあ、まあ、ここじゃなんですから」とブラボー親爺が先立って上り込む。

蛸の妻は娘に急かされながら入る。

「こんばんは」と青年が挨拶した。

「どうしたの、小川くんまで」

「蛸のおじさんと、散歩とかしていたんだ」

「おうよ。野球見たり、飯を食ったりな」

「そうなんだ」

皆で座敷に入る。座敷机の長い辺に蛸の妻と娘が、向かいに蛸と小川青年が坐った。結わいた柳を挿した床の間を背に、ブラボー親爺が端に構える。犬は庭で待ち受ける。

不満なけしきが頬に出ている蛸の妻に、ブラボー親爺が話にかかる。

「奥さん、まあ、そう、料簡を突っ張らずに。とにかく戻ってきて僥倖だ」

「そりゃそうです、蛸なんて」と頬を戻す。

「だから書付を持たしたろ。犬ころに」

「わん」と庭に控えた犬が相槌を打つ。

「蛸になったって書いといただろ」

「あんな手紙じゃ、わけがわかりませんよ」

「お父さん、どこ行っていたの」

「今日は合奏会だな」

「珍しいね。どうだった」

「あんな小せえ楽器が、あんなにでっけえ音を出すたあな」

「何言ってるんです。今の今まで、どこでどうしていたか聞いているんです。それに何で蛸」

「隣町の横丁で下宿していたのよ。おれだって、働こうとしたんだぜ。でもこのご時世だ。蛸じゃ、簡単に出来なくてな」

「どんなご時世だって、蛸を雇ってくれる所なんてあるものですか」

「おまえが、そう言うこたあねえだろ。おれだってな」と蛸が言いも切らぬに、

「まったく、どこをほつつき歩いていたかと思えば」と胸のうちをかぶせる。

「まあ、まあ、とにかく帰って来たんだ」とブラボー親爺が有めた。

「わたしは、何が何だかわかりませんよ」

「おれがおれの家に帰って来て、何がいけねえんだ」

「帰って来たって、蛸になって帰って来ることはないでしょ」

「ええ、帰って来たんだからいいじゃん」

「おまえは父親が蛸だっていいだろうけどね、わたしなんて夫が蛸だよ。

昔話じゃないってのよ」

「とにかく、申し餅を分けるのにも青田がいた方が便利でしょ。正月を家族揃って迎えられる、めでたしめでたし、だ」

ブラボー親爺が、この場の結論を出して、湯飲みに手を伸ばすのを気に留めずに、蛸の妻は続ける。庭で立っていた犬は蹲った。

「だいたい何ですか。その姿は。何で蛸になってるんです」

「知らねえよ」

「知らないってことはないでしょ。蛸になったのはあなたなんですから」

「おれだって手続き踏んで蛸になったわけじゃねえや。べらぼうめ。そんなに知りたさゃ、どっかの偉え坊さんにでも聞いてみる」

「ま、人が心配して言ったのに」

「おめえのどこを探したら心配なんてもんが出て来るんだ。ちいたあ、お

れの肚になって案じて見ろってんだ。おれあ、下宿暮しでよ。縁側で悟りを得るところだった。春夏秋冬神祇積教恋無常だな」

「その通り。それに奥さんなんのかの言いながら、青田が蛸になったのをわかった様ですし」とブラボー親爺は、鉢に入った蓬萊豆を口に放り込む。

「そうよ」と娘も続く。

「そうだけど」

「小川くんは、お父さんとどこで会ったの」

「え、いや」

「何だ。そういや、おめえたち、友だちとか言ってたな」

「友だちじゃないわよ。付き合ってたのよ」とえくぼを深くした。

蛸は顔を紅潮させたつもりで、赤い顔を蒼くした。

「何だ、そんな間柄だったのか。おれなんか見合いだったからな。付き合いとか、何だその何だとか。いいなあ。最近は。でも早過ぎない。いやいや、そんなものなのか」

「何言ってるんですか。顔を赤くしたり蒼くしたり」

「お母さんは、お父さんが戻って来ていいんだよね」

「そうね」

「それに、あのハチ公みたいな犬。あの子もお父さんの友だちなんですよ。うちで飼ったらいいのよ」

「わん」

「ほら、悦んでるよ」

「ありゃ、今こそ、恩を返すって言ってんだよ」と蛸が通訳する。

「お父さん、犬と話せるの」

「何だか知らねえが、言うことくれえ、わかるのよ」

「恩って何。助けてあげたの」

「なに、コーヒー牛乳をおごってやったんだ」

「それだけですか。利口な犬だねえ」

「それじゃ、決まりね」

「なにしろよかった。後片づけは任せとけ。蛸壺も取ってきてやる。ええ

と、山本だっけ」

「すまねえな。どのみちいらねえが、ああいう物は残しておかない方がいいのよ。『物には縁がついてまわる』っていう俗諺もあるからな。ちゃんと塩を撒いてから捨てないと」

「じゃあ、今日はゆっくり風呂に入って休むんだな」と、ブラボー親爺は腰を上げた。

「おう。うちは風呂だけは檜造りだからな」

「じゃあ、今日はそろそろ」

「あら、何か召し上がって行って下さいな」

「いやいや、せっかくですから、青田とくつろいで下さい」

「僕も帰るよ」

「そうだね。またね」

「いろいろと、お世話様でした。また、お礼かたがた伺いますので」

玄関に出て、ブラボー親爺と青年を送る。玄関燈が、外から流れ込もうとする夜の空気を照らしつけていた。澄み渡った夜空に、蒼い星が瞬きだす。

郵便の赤い車が年賀状を山積みにして去った。すれ違いに正月飾りを積んだ大八車が藁の匂いを引きながら通る。

「わん」

「あ、ハチは家にいてね」

「今日はすまなかったな。恩に着るぜ」

「じゃあな。ブラボー！」

「よいお年を」と青年も行く。

「おう。たあこ。たあこ。たっこ。たっこ。たっこ」

〈完〉